

2023年11月12日 主日礼拝

説教題「そんなことがあってはならない！」ヨハネ福音書3章16～17節

主任牧師 加藤 誠

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ福音書3章16節)

「神は愛である」。これは聖書の中心的メッセージです。ただ「愛」という言葉は、日本人の場合「恋愛」の「愛」と重ねて受け止められがちです。聖書が私たちに伝えている「愛」とは何か。わたしは「慈しみの祈り」と言い表したいと思っています。私たち一人ひとりの存在を両手で大切に包むように注がれている祈り。その神の「慈しみの祈り」を、主イエスは身をもって生きられたのでした。

私たち「人間の愛」はどこかに打算や相手を支配する思い、あるいは自分の願望の投影が混じりこむことが多いのです。「愛」と言いながら、それは自己中心の感情であり、相手を利用して自分の願望を遂げようとするもの。それに対して、主イエスが教えてくださった「神の愛」は、その人がその人らしく輝きをもって生きることを願う「慈しみの祈り」です。ですから一人ひとりが抱えている悲しみ、痛み、虚しさを受け止め、時には厳しい励ましをもって寄り添い歩む「祈り」なのです。

この「神の愛」を離れては人は生きることができません。昔、ある国の王が赤ん坊たちを集めて実験をしました。人間が生まれて最初に発する言葉は何か。それを確かめるために、赤ん坊を世話する人たちに「ミルクは与えても決して話しかけないように」と命じました。果たして赤ん坊が最初にどんな言葉を発したのでしょうか。あろうことか、赤ん坊たちはひと言も発する前にみんな衰弱して死んでしまったのです。いくらミルクを与えられても、自分の名を呼び、微笑み、語りかけてくれる愛のないところでは、赤ん坊たちの生きる力は萎えてしまい、衰弱してしまっていたのでした。

京アニ裁判が現在行われていますが、その中で全身に重度の火傷を負った青葉被告の治療に当たった医師が語っていた言葉が印象的でした。「治療チームの中には彼の命を救うための治療をすることに懸念や反対をする者は一人もいなかった。誰もが彼の命を救うために懸命に力を尽くした。彼が命の尊さを受け取り直し、自らが犯してしまった重大な犯罪としっかり向かい合っていてほしいという願いがそこにはあった」。日々、命の尊さと向かい合っている医師の倫理観と使命感を感じました。青葉被告は「自分のためにここまでしてくれるのか」とつぶやいたと言います。彼は幼い時から実の親から虐待を受け続け、疎外され、幼い時に育まれるべき自己肯定感を一切持たずに大人になってしまった。人は自己肯定感を持ってないと、自らの存在を否定するか、自分で自分を肯定するしかない。妄想の中で自分の偉大さを膨らませ、それを認めない社会に対する憤りと憎悪にかられていったと言われています。彼の行為は決して許されるものではありませんが、しかし、彼自身の命がどれだけ尊いものであ

るかを、四十数歳になってはじめて体感できた…という事実を考えさせられます。生まれてから「慈しみの祈り」にまったく触れることができずに育ち、疎外され、歪められ続けた彼の大きな悲劇をそこに見ざるを得ません。私たち人間は「神の慈しみの祈り」を離れては生きることができないのです。

イエス・キリストは、その「神の慈しみの祈り」を、私たち一人ひとりに手渡すために生きてくださったのですが、あろうことか、人々はそのイエスを十字架に追いやり、その命を奪ってしまったのです。

主イエスが語られたたとえ話に「ぶどう園の主人と農夫のたとえ」があります（ルカ 20 章）。ぶどう園の主人が長い旅に出たのをよいことに、ぶどう園を自分たちのものにしようと、主人の派遣した僕を追い返し、主人の愛する息子を殺してしまった農夫たちのたとえ話です。なんとも血なまぐさい話です。が、神から見たら、私たち人間がどれだけグロテスクで血なまぐさいことを平気でしてかしているかを主イエスは示されたのでしょう。この話を聞いた弟子たちは「そんなことがあってはなりません！」と答えました。農夫たちの犯罪は傲岸不遜以外の何ものでもなく、けっして赦されてはいけない犯罪だからです。

しかしながら、このたとえ話と同様に、神が深い愛を託して派遣された独生子イエスを、私たち人間は十字架につけて殺してしまいました。「そんなことがあってはなりません！」ということを私たち人間はしてかしたのです。普通であれば、主イエスを裏切った弟子をはじめ、処刑に関わった者たちの責任を厳しく問い処罰して良いはずの状況です。ところが、主なる神は深い慈しみの祈りをもって、私たち人間に対する赦しを選ばれました。人間の裁判ならば、原告が「そんなことあってはなりません！」と厳罰を求めて叫んでもおかしくない状況において、神は私たち人間に対する赦しを選ばれたのです。なぜなら「神が御子を遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世を救われるため」（ヨハネ 3・17）であり、「信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るため」（同 16）だからです。先ほどの青葉被告を治療した医師が語ったように、主なる神は、本来なら決して赦されてはならない罪を犯した私たちが、自分たちにどれだけ深い神の慈しみの祈りが注がれているかをお示しになることで、私たち自身が、自らの過ちに気づかされ、自分たちの方から神の慈しみに立ち帰る者とされることを望まれたのです。

神がわたしたちを招いておられる「永遠の命」とはどういうものでしょうか。「永遠の命」というと、いつまでも生き続ける命ということですが、わたしは自分が、このままの状態ですらいつまでも生き続けることが幸いだとはとても思えません。自己中心の愛を抱え、相手の輝きを願うよりも自分の願望を優先するがゆえに、多くの悲しみを自分の周りに創り出しているわたしは、神さまの慈しみの祈りによって清められる必要があるからです。このわたしを清め、救うために十字架に赴かれた主イエスの深い慈しみの祈りを、今日、大切に受けていきたいのです。